

村岡到編 『マルクスの業績と限界』 ロゴス , 2018年
 , 123頁

著者	齊藤 日出治
雑誌名	大阪産業大学経済論集
巻	20
号	1
ページ	43-45
発行年	2018-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1338/00002076/

村岡到編『マルクスの業績と限界』ロゴス, 2018年, 123頁

齊 藤 日出治[†]

マルクス生誕二〇〇年を記念する、五名の執筆者が、このテーマについて統一した編集方針もないままに寄せたこの論文集は、はからずもその「記念」の意味を浮き彫りにする。本書は、現実のコンテキスト、あるいはそれに向き合う自己のスタンスと無縁に取り組みられたマルクスの学説史研究でも、思想史研究でも、ない。マルクスの思想を、かれの生誕後二〇〇年の現実の世界史をかたちづくってきた社会闘争の言説として再検証する、という課題が本書で思わざるかたちで提示されたのである。この二〇〇年は、近代資本主義のダイナミックな発展によって社会の激変をもたらした。わたしたちは科学技術の革新、都市化の進展、産業の発展、社会制度および社会諸関係の大転換、そして戦争と革命の時代を経験した。そして、そのひとつひとつの現実の動きに、わたしたちはマルクスの言説を介してなんらかのかたちで介入し参画してきた。

とりわけ、二〇世紀に出現した「現存社会主義」は、マルクスの言説によって築かれ、わたしたちはその現実性に依拠すると同時に、肯定的であれ、批判的であれ、この体制に関与してきた。その自己の現実とのかかわりを度外視して、マルクスの思想を語ることはできない。

本書の執筆者がとりあげるテーマは多岐にわたるが、いずれの執筆者も、マルクスの思想に内在しながら、その思想と現実の歴史とのかかわりを問い直している。つまり、みずからが現実の歴史に責任を負う者であることを自覚しつつ、マルクスを自己自身とともに再検証する。要するに、わたしたちに求められているのは、自己検証を伴うマルクスの思想の検証なのである。

大内秀明「晩年マルクスとコミュニタリアニズム」は、晩年のマルクスが古代史や共同体の研究に執着したことに注目し、マルクスの社会主義を村落共同体やギルドの労働組織のイメージにおいて照射する。つまり、社会主義を生産手段の国家所有としてではなく、

[†]大阪産業大学 経済学部 元教授

草稿提出日 4月20日

最終原稿提出日 4月20日

自由な労働者のコミュニティによる土地や生産手段の共同所有として再定義する。そこから、国家社会主義者よりもむしろコミュニタリアニズム（共同体社会主義）としてのマルクス像が浮かび上がる。

久保隆「国家や権力の無化は可能か」は、政治的国家を市民社会の生のうちに吸収するというマルクスの国家論のシェーマが国家および権力の強靱性をとらえていないとして、国家と権力は人間の共同幻想(吉本隆明),あるいは日常生活の権力諸関係の網の目(ミシェル・フーコー)というかたちで作動しており、その視点から、二〇世紀社会主義においてマルクス主義自身が国家を正当化する哲学(権力の言説)として機能したことが批判に付される。権力の無化ははたして可能なのか、と。

千石好郎「マルクス自由論の陥穽」は、マルクスの自由の概念にはらまれる全体主義的本性に着目する。マルクスは自由の概念を、資本主義の物象化された社会諸関係の呪縛から解放され、人間みずからが社会諸関係を自由に組織すること、として提示する。しかし、そこで自由の主体とされる人間とは、個人ではなく、類的存在としての人間である。物象化された社会諸関係が合理的計画的に組織されることによって、類的存在としての人間の自由は実現しても、そのことによって個人の多様性や人類の多様性は無視され、しかも社会諸関係の合理的組織化を口実にして個人の多様性の抑圧が正当化される。だから、ソ連型社会主義の抑圧的管理社会は、マルクス思想の逸脱から生じたのではなく、その逆にマルクスの自由の理念それ自身が招いたものではないのか、と。

武田信照「マルクス・エコロジー・停止状態」は、マルクスのエコロジー論をとりあげる。マルクスはたしかに自然と人間の物質代謝過程を考察し、その代謝過程の持続可能性を尊重している。だが、マルクスの主眼は、この物質代謝過程を人間の共同的規制のもとに置くことによって経済の発展をめざすところにある。物質代謝過程を合理的に組織することによって、富の増進を図り、欲望の拡大と多様化をめざす、これがマルクスの眼目である。とすれば、それをもってマルクスを「エコロジーの思想家」と呼ぶことができるのであろうか。むしろ、経済を停止状態において自然の自発的活動を重視するミルのほうが、はるかにその名にふさわしいのではないかと。

村岡到「マルクスの歴史的意義と根本的限界」は、マルクスから継承すべき思想を、国家による指令経済ではなく、自由人による「協議した計画」、協同組合的な富の発展に求める。これに対して、マルクスの根本的限界は、経済と政治を一体的にとらえて、経済を支配するブルジョアジーの権力が、そのまま政治の次元にも貫かれると考え、法にもとづく統治という近代の政治制度の特質を軽視したことにある。そのような政治の軽視が、歴史を階級闘争の歴史ととらえ「収奪者は収奪される」という教条主義的な歴史把握をもた

らしたのだ、と。

社会主義とコミュニズム、国家と権力、自由、エコロジー、階級、歴史認識といった多岐にわたるマルクスの思想の再検証は、マルクスとの距離感の置き方においても、マルクス思想の理解においても、かなり異なっており、場合によってはたがいに対立する主張さえ見られる。

だが、評者には、これらのマルクス思想の再検証が、冒頭に述べたように、マルクス生誕後の二〇〇年の世界史の動態にマルクスの思想と向き合うことによって主体的にかかわろうとする共通の強い意志を感じ取ることができる。とりわけ二〇世紀社会主義を招来させたマルクスの思想を、その内側から掘り起こして、思想と現実との絡み合いをみずからの責任において切開しようとするスタンスに注目したい。

社会主義が労働者や民衆の解放の理念ではなく抑圧の理念に反転してしまったこと、社会主義が人間と自然の物質代謝過程を抑圧するシステムになってしまったこと、社会主義が計画の名の下に個人の自由を抑圧するシステムになってしまったこと、社会主義が国家を死滅させるよりも国家を強大化させるシステムとなってしまったこと、そのような逆ユートピアを、革命を希求した主体がみずから招来してしまったこと、この痛切な反省を抜きにマルクス二〇〇年の生誕記念などありえないからである。

マルクス思想の再検証を通して現存社会主義に向き合うこのスタンスは、そのまま現存社会主義の崩壊後に台頭し世界を危機に陥れているグローバル資本主義に向き合うことへと通ずる。

ここで摘出されたテーマは、いずれもグローバル資本主義の危機に直面して、そのオルタナティブな社会を模索する運動にとって貴重な手がかりを提供している。グローバル資本主義は、いまや核戦争、環境危機、地域紛争、移民と難民の危機をつぎつぎと生起し、人類と地球の存亡の危機を招きつつある。にもかかわらず、その危機の脱出路を社会主義の名において見いだそうとする集合的意思はあまりにも脆弱である。

しかしわたしたちは社会主義の名で呼ばれていなくとも、資本の価値増殖の運動が引き起こす社会の破局的危機を超えて、新しい社会を創造する萌芽となる無数の運動が世界各地で現出していることを知っている。フェアトレード、マイクロファイナンス、協同主義にもとづく各種の協同組合、地域通貨、社会的連帯経済、コミュニティ運動、NPO、NGOの国際運動など、がそれである。マルクスの思想に向き合う作業とは、このようなかたちで現出している無数の社会闘争に資本主義に代わる新しい社会を創造するかたちをあたえ、名付け、方向付ける協同の営みではないだろうか。本書がその協同の営みの貴重なステップになることを期待したい。